



箱根駅伝

勝利の

名言

監督と選手
34人、50の言葉
生島 淳

箱根駅伝 勝利の名言

——監督と選手 34人、50の言葉

生島 淳

講談社+α文庫

生島 淳—1967年生まれ。スポーツライター、ジャーナリスト。早稲田大学卒業後、博報堂勤務を経て現職に。国内外を問わない取材、執筆活動のほか、ラジオパーソナリティとしても活躍。NHK-BSのスポーツ番組のキャスターも務める。著書には

『駅伝がマラソンをダメにした』（光文社新書）、『スポーツを仕事にする！』（ちくまプリマー新書）、『箱根駅伝』『箱根駅伝 新ブランド校の時代』（以上、幻冬舎新書）、『箱根駅伝勝利の方程式』（講談社）、『中村勘三郎物語』（扶桑社）などがある。

講談社+α文庫 はこね えきでん しょうり めいげん **箱根駅伝 勝利の名言**

— 監督と選手 34人、50の言葉

いくしま じゅん 生島 淳 ©Jun Ikushima 2014

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

2014年10月20日第1刷発行

発行者——— 鈴木 哲

発行所——— 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部(03)5395-3529

販売部(03)5395-5817

業務部(03)5395-3615

カバー写真——— 月刊陸上競技写真室

デザイン——— 鈴木成一デザイン室

カバー印刷——— 凸版印刷株式会社

印刷——— 慶昌堂印刷株式会社

製本——— 株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料は小社負担にてお取り替えします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは

生活文化第二出版部あてにお願いいたします。

Printed in Japan ISBN978-4-06-281572-7

定価はカバーに表示してあります。



目次

まえがき

3

監督編

——どう導くか、どう勝つか

大八木弘明

駒澤大学監督

1 「箱根だけは、ごまかしが利かないんだよ」

16

2 「なんとかして選手に自信をつけさせたかった。それで『復路優勝』を狙ったんです」

20

3 「前を追いかけても、全然背中が見えない。それでも気持ち切れない選手が強いんだ」

24

酒井俊幸

東洋大学監督

4 「その1秒をけずりだせ」

28

5 「駅伝を走るからには、やっぱり先頭に立たないことには

28

責任を果たしたことはない」

32

6 「『ひとり一役』。箱根で勝つには、部員全員が仕事をする必要があります」

36

7 「優勝を狙えるチーム、シード権を狙うチーム、

予選会突破を目指すチーム、に分かれていくかもしれませんね」

40

渡辺康幸

早稲田大学監督

8 「たたき上げの選手がいなくなったら、早稲田が早稲田でなくなります」

44

9 「柏原が追ってくる80分間、これは本当に地獄ですよ」

48

原 晋

青山学院大学監督

10 「何百回の失敗よりも、1回の成功体験のほうが

52

学生には大きな財産になるんです」

11 「忘れていけないのは、箱根駅伝も大学生の部活動の一環だということ。

56

箱根は一年間頑張った成果をお見せする、『学習発表会』の場でもあるんです」

12 「4区って重要だよな。冗談？ いや、これは本気ですよ」

60

13 「学連選抜にはチーム力がない。だったら、

チーム力を植えつけたいと考えたんです」

64

西 弘美 明治大学監督

14 「5000、10000、ハーフの記録をどう駅伝に結びつけるか。

それが腕の見せどころです」

68

別府健至 日本体育大学監督

15 「3年生をキャプテンにする。負担も考えたけれど、チームに核が必要だった」

72

16 「優勝しようなんて、絶対に考えるな」

76

上田誠仁 山梨学院大学監督

17 「明日、走ろうと思って準備していたら、主将から『走らなくていいぞ』と

言われたんです。走らなくていいぞ、と」

80

18 「留学生がエース区間を走ると決まっているわけではありません。

自分が2区を走る、と思う選手がウチには必要なんです」

84

中野孝行 帝京大学監督

19 「策士と呼ばないで」

88

花田勝彦 上武大学監督

20 「高校生には、一度キャンパスに足を運んでもらってから、

志望するかどうか決めてもらっています」

92

前田康弘

國學院大学監督

21 「國學院は箱根に参加するだけのチームでした。

選手には『歴史を変える』という意識が必要なんです」

22 「選手には、『往路キャラ』と、『復路キャラ』があるんです」

100 96

伊藤国光

専修大学監督

23 「箱根駅伝のために陸上競技をやるのはおかしい」

104

岡田正裕

拓殖大学監督

24 「優勝を狙うことと優勝できることはかなり違う。それが箱根駅伝です」

108

大後栄治

神奈川大学監督

25 「高速駅伝時代の到来。もう、簡単に優勝を狙える時代じゃない」

26 「5区、6区の特珠区間は、才能よりも練習がモノをいいます」

27 「箱根駅伝というものは、不思議と大学のカラーを映し出すものなんです」

120 116 112

青葉昌幸 大東文化大学

28 「信頼できる4年生が4人いるチームは強い」

124

澤木啓祐 順天堂大学

29 「箱根駅伝には学生スポーツの素晴らしさがあります」

128

中村 清 早稲田大学

30 「いいかい、お父さん、お母さんが見てるんだよ」

132

インタビュー①

大八木弘明 駒澤大学監督

……選手を強くする発想とは／箱根駅伝のコーチング

136

選手編

——何を学ぶか、何を考えるか

瀬古利彦 早稲田大学

31 「権太坂を越えたところで足が止まってしまったんだ。

1年生のときは、本当に苦しかったよ」

146

32 「箱根? ついでで走ってたからね、ついでで」
150

柏原竜二 東洋大学

33 「ペース配分とか関係ないです。
とにかく目の前を走っている相手を抜いていっただけです」
154

出岐雄大 青山学院大学

34 「考える力が伸びると、タイムも伸びると思います」
158

猪俣英希 早稲田大学

35 「タスキを手渡すこと、これには目に見えない力が宿っています」
162

天野 峻 神奈川大学

36 「選手生活最後のレースでいい走りができました。
いい形で競技人生を終えることができて、僕は幸せです」
166

寺田夏生 國學院大学

37 「下見だけじゃわかんないよ、中継車だって曲がったよ」
170

文元 慧

明治大学

- 38 「1区を走り終えたら、左耳だけがおかしくなっちゃってしまつて」

174

一色恭志

青山学院大学

- 39 「テレビで見る人たちと一緒に走っているんで、緊張しちゃいましたよ」

178

神野大地

青山学院大学

- 40 「10時15分に寝ることを徹底しました。

生活面を見直すと、陸上は強くなれます」

182

服部弾馬

東洋大学

- 41 「高校と大学の差は、自分で練習を組み立てなければならぬことです」

186

平井健太郎

京都大学

- 42 「陸上の練習と受験勉強って似ているんですよ。計画性と実行力の問題です」

190

服部翔大

日本体育大学

- 43 「レースでは時計はつけません」

194

設楽啓太 東洋大学

44 「大学では視野を広くしてもらい、そのおかげで欲が出るようになりました」

設楽悠太 東洋大学

44 「兄弟で走る最後の駅伝、ふたりそろって区間賞が取れてよかったです」

窪田 忍 駒澤大学

45 「違うタイプのランナーが集まって、切磋琢磨する。それが大学の面白さです」

大迫 傑 早稲田大学

46 「駅伝では、自分が主役である必要はないです」

47 「大学生のトラックからマラソンに移行するタイミングが早くなっていて、僕はトラックでもっと窪田と勝負したいんですけどね」

今井正人 順天堂大学

48 「駅伝での攻めの走りが自分の持ち味です。マラソンでも駅伝の気持ちで走ることができるようになりました」

篠田正浩 早稲田大学

49 「箱根の山を目指し、その先には富士山がある。

だから箱根駅伝は、若者が正月から日本の霊峰を目指して走る神事だ」

218

むすびに

金栗四三 箱根駅伝創設提唱者

50 「アメリカ大陸横断駅伝をやるうじゃないか」

222

インタビュー②

金 哲彦 陸上競技・駅伝解説者（早稲田大学）

……中村監督の指導／指導する立場になって／解説者としての「言葉」

226

文庫版のためのあとがき

234

箱根駅伝 勝利の名言

——監督と選手 34人、50の言葉

生島 淳

講談社+α文庫



まえがき

まえがきだが、レースが終わってからのことを書く。

箱根駅伝が面白くなるのは、テレビ中継が終わってから。これは現場で監督、選手たちの話を聞いてきた私の持論である。各大学が大手町のゴールに飛び込んできたあと、そこにはいろいろな感情が渦巻いているからだ。最近で思い出に残っているシーンと言え——。

2014年の東洋大、優勝した酒井俊幸監督さかいとしゆきの笑顔は柔和だった。前哨戦である出雲、全日本の両駅伝では厳しい表情を浮かべていただけに、ホッとしたようだった。私を見つけると、いきなりこんな言葉をかけてきた。

「奇策にあらず、王道なり」

5区にスピードランナーの設楽啓太したらけいたを起用したことを指していた。考え抜いた末、酒井監督は主将を山上りに挑戦させ、それが優勝を引き寄せた。采配の勝利である。

早稲田についていえば、全日本の情景が思い浮かぶ。早大は1区で柳^{やなぎとしゆき}利幸が15位と出遅れ、最終的には4位と盛り返したが（この結果は早大の総合力が上がつている証拠だった。箱根での成功の伏線は全日本にあった）、1区のランナー不在が浮き彫りになった。全日本が開催される伊勢では、ゴール地点から閉会式が行われる神宮会館まで徒歩でチーム関係者、ファンが移動するのだが、そのとき、柳と相楽^{さがらゆたか}豊コーチが肩を寄せ合い、私の前を歩いているのが目に入った。

とても、話しかけられる雰囲気ではなかった。なにか、柳という選手のキャリアにとつて重要な瞬間に思えたからだ。

閉会式会場で、相楽コーチをつかまえた。彼と、なにを話していたんですか、と。

「ご覧になってましたか」と相楽コーチは笑みを浮かべ（苦笑だったかもしれない）、
「出雲、全日本と1区で柳が結果を出せなかったので……。いま、柳にとつて必要なのは『カウンセリング』だと思っています。実力的に、柳は早稲田の準エース格だといふのは変わりませんから、箱根までに立ち直るきつかけを作りたいです」

相楽コーチの言葉では、「準エース」という部分に力が入っていた。そして2ヵ月後の箱根。柳は7区で区間5位の好走を見せた。よかった——。そう思った。

箱根のレースを終えて、駒大の大八木弘明監督おおやぎひろあきはとても悔しそうだった。私の顔を見つけると「箱根だけはごまかしが利かないんだよ、本当に」と声をかけてきた。出雲、全日本で勝っていたとしても、箱根で勝てないとダメージが大きい。三冠が手の届くところにあっただけに、悔しさが倍増しているようだった。それでも、レースが終わったばかりだというのに、すぐに次のシーズンに目を向けていたのが大八木監督らしかった。

「俺は会津の人間だから、しつこいよ。もう一回、やりますよ」

いま、箱根で主導権を握るふたりの指導者、大八木監督、酒井監督ともに福島生まれ。酒井監督は「会津の人たちは義を貫き、粘り強い。大八木監督にもそうした強さを感じます」と評す。しばらくの間、ふたりの知恵の絞り合いが見られそうだ。そしてまた、他の監督、選手たちも限界に挑んでいく。

彼らの戦いのあと、出てきた言葉を私は拾い、みなさんに伝えていこうと思う。